

教師がさせるというより、子どもが 学び合おうとするのが「学び合う学び」

1 一人ひとりの学びと仲間との学び合い

授業のどこでグループを入れたらいいですか？

どのようにグループで話し合わせたらいいですか？

どういう課題を出せば、グループの話し合いが弾みますか？

これらは、「学び合う学び」に取り組んでいる学校の先生方からよく出る質問です。お気持ちはよくわかります。グループによる「学び合う学び」の実現に本気で取り組み、一日でも早くしっかり学び合える子どもにしたいと思っておられるのでしょう。その熱心さに会おうと楽しい気持ちになります。しかし、これらの悩みには共通する考え違いがあるように思います。それはかなり理想的なことなので、これまであまり語ってこなかったのですが、わたしたちの取り組みを本質的なものにするため、あえて申し上げておこうと思います。

多くの先生方は、「学び合う学び」は学び合いを取り入れる授業、つまり必要なときに教師の指示で学び合うようにさせるものだと思っておられるではないでしょうか。本当はそうではないのです。「学び合う学び」が目指しているのは、教師によって学び合うようさせられる学習ではなく、一人ひとりの子どもが学び合うことに必要感を抱き、子どもが自ら学び合う、そういう学びなのです。

いくつかの学校でよく受ける質問に次のようなものがあります。

『学び合う学び』についての本を読むと、課題を出したらすぐペアやグループにするほうがよいと書かれているのですが、そういうことをすると、よく考えもしないうちに友だちの答えをそのまま受け入れる子どもになるのではないのでしょうか。ですから、まずは一人ひとりが自分で考える時間をとったほうがよいと思うのですが、どうなのでしょう。」

この質問をした人のお考えはよくわかります。教師の多くはたぶん同じように考えるだろうと思います。しかし、もし前述したように、「学び合う学び」を教師がやらせる学び合いではなく、子どもが学び合おうとする学びだと考えたら、こういう質問は出てこないのではないのでしょうか。

その学級が、普段から、自ら課題に取り組む子どもの意欲と態度が育まれている学級だったらどうでしょうか。課題が提示されたとき、机がグループ型に並べられていても、二人ずつのペアになっていても、机の位置に関係なく、すべての子どもが一人ずつずっと考え始めるのではないのでしょうか。

つまり当たり前のように一人ひとりの取り組みが始まるのです。この問題を解きたい、このことについて知りたい、この疑問を解明したい、この出来事の奥にあるだろう事実に出会いたい、課題提示により子どもたちがそういう思いになったら、机がどのように並べられていようとも、子どもたちは確実に一人ひとり考え始めます。

では、なぜ、課題提示のときからわざわざ机の並べ方をグループやペアにしているのでしょうか。そして「学びの共同体」においてなぜそれでもよいと言われているのでしょうか。

そこには、二つの理由があります。

一つは、必要感が生まれたらいつでも友だちに尋ねることができるようにするためです。

教師が「一人で考えなさい。友だちと相談してはいけません」と指示して、何分間か一人学びをさせたとしましょう。その教科の学習がとても苦手な子どもはどうするでしょうか。最初は考えてみるのだけれどどうにも理解できない、そのうち、どうすることもできなくなって諦めてしまう、そういうことになるのではないのでしょうか。子どもによっては、はなから考えることを放棄してしまうことも考えられます。一人学びを強要することで、孤立感を深め、わからなさを抱え込んで学びへの意欲を喪失する、そういう子どもを生み出しかねないのです。

本来、学び合いは、教師に指示されるから行うものではありません。子どもが自ら、どうにもわからないなあ、この考えでいいのかなあ、そう思って自ら尋ねる、だれかの支えを求める、また、ともに考えようと仲間を誘う、そういうものなのです。他者とのつながりがなければ、すべての子どもの学びが保障されないからです。諦めなければならない子どもが出てしまうからです。

「自己解決」という言葉があります。言葉だけ聞くと、子どもが一人ひとり自立して素晴らしいことのようにですが、現実には、それを強制されることによって学びから遠ざけられる子どもが生まれているのではないのでしょうか。子どもによっては「自己解決」ということばほど酷なものはないのです。本当なら、そういう子どもには「ねえ、これどうするの?」「どうしてこれはこうなるの?」と他者に「尋ねる」「訊く」ということが欠かせないのに、それをできなくしているのが「自己解決」だからです。

子どもたちの机をすべて教師の方に向けて一人ずつ分断するのではなく、初めからペアやグループにするのは、子どもたちがいつでも尋ねたり訊いたり、子どもたち同士が対話をしたりできるようにするためなのです。それはすべての子ども一人ずつの思考と対立するものではありません。それをできなくするものではありません。学び合いと個人による思考は共存しているのであり、共存していることにより、むしろ一人ひとりの思考が促進されているのです。

もう一つの理由、それは、「ジャンプの課題」のようにかなりの質の課題に挑むとき、子どもは、少しでも早い時間から協同的に学び合いたくなるからです。多くの子どもがすっとは解けないような課題に挑むには子どもたちの学び合いは欠かせません。一人では無理だと思えるようなこと、かなり難渋するだろうと思えるようなことが、仲間と知恵を出し合うことで解けたり深めたりできるからです。この学び合いを求める子どもの気持ちは、学び合って克服する体験をすればするほど強くなります。新学習指導要領に登場した「主体的、対話的で深い学び」において、それがすべての子どもにおいて実現するため子ども同士の対話による学び合いが欠かせないと言われているのは当然のことです。

しょう。だれが考えてもわかることです。

もちろん、ここでも、普段から、自ら課題に取り組む子どもの意欲と態度が育まれている必要があります。そういう学級だったら、課題提示の後あまり時間を置かず子ども同士の学び合いが始まったとしても、提示されたその瞬間からすべての子どもに課題に向かう意欲が存在しています。現に、わたしが訪問する学校で、提示されたその瞬間から、どの子どもも嬉々としてグループの仲間とのかかわりを始める光景に出会っています。つまり、一人ひとりの子どもの学びへのスタートは、きっちり切れていたのです。いきなりペアやグループをすると、何も考えず教えてもらうだけになるのではという心配は、自ら学びに向かう楽しみ・喜び・魅力を知っている子どもたちの学級では、しなくてもよい心配だということなのです。

2 自ら学び合おうとする子どもを育てるために

大切なことは、教師が子どもを学び合わせるのではないということです。子どもが学び合おう、学び合いたいという意思を抱いて、子ども自ら仲間とかかわって学ぶ、それが「学び合う学び」なのです。

とは言っても、それはそうだろうけど、現実には、自分の学校の子どもたちには、自ら学び合おうという意欲も態度も形成されていません。だから、それは絵に描いた餅でしかありません。そういう声が聞こえてきそうです。確かに現実はそのかもしれません。そこで大切なのは、その現実甘んじるか、少しでも本来の「学び合う学び」を目指すかという教師の意志なのではないでしょうか。当然、本来の「学び合う学び」に向けた模索をすることのほうがよいに決まっています。よい授業をするためではありません。子どもの学びのために、子どもの未来のためにです。しかも、学習に不安感を抱いている子どもにとってそれが必要だからです。

今は6月、子どもたちの自ら学び合おうという意思と意欲と態度はまだ希薄である可能性があります。ですから、そういう状態の学級では、今は、教師から学び合いの場を設定し、学び合う時間を設け、学び合いをやらせていっているのではないのでしょうか。それは仕方のないことです。

そこで大切なのは、指導をする教師に、教師の指示に従って学び合いをするという状態から、子どもが自ら必要だと思ったときにやわらかく、真剣に、あたたかく仲間との学び合いを始める子どもにしていくのだというビジョンがあるかないかです。

ビジョンのある教師の頭の中には、今は教師の指示がなければ学び合おうとしないけれど、自分が指示しなくてもずっと学び合う学級のイメージができています。そして、そのイメージ通りの状態にするまでに、何をどうしていけばよいかという考え方をし始めているのではないのでしょうか。

子どもが自分たちで何かをしようとするには、なんとしても、子ども同士のつながり感、学び合いに対する必要感と切実感、そして学び合ってよかったという快感がなければなりません。

子ども同士のつながり感は、教師による日頃の学級経営によって生み出されます。ですから、授業の中でも、授業以外でも、教室の仲間とのつながりを大切にする経営を心がけなければなりません。それにはまず子どもとつながる、もちろん一人ひとりの子どものことですが、そのつながりを求め、

つながることを喜び、つながりを大切にすることを教師がもっていなければなりません。人と人とのつながりに敏感な教師でなければつながり合う学級はつくれません。その際、子どもに対するケアの心がなければなりません。そういう教師に日々接することにより、子どもたちも自然とケアし合うつながりを大切にできるようになるのです。

学び合いに対する必要感、切実感は、困ってしまったとき、また困っている仲間に対したときに生まれます。そういう必要感・切実感が湧いたとき、その思い・願いがさっと満たされたら、子どもの学び合いに対する信頼と期待はさらに高まっていくでしょう。

もちろん、課題の質と課題提示の在り方、そして課題に向かう魅力を醸し出す教師の対応も重要です。子どもが「それ、できるようになりたい」「どうしてそうなるのだろう」「その問題、めっちゃ難しそうだけど、解きたい」と、課題に対する意欲を燃やせたら、学び合いに対する必要感・切実感はかなりものになります。それには、教師が準備する課題がものを言います。子どもが目の色を変えて取り組み始めるような課題を探し出し、子どもを夢中にさせるような提示をし、課題に向かう子どもたちを温かくじっくりと支える対応をすることで、子どもたちの学び合いに対する必要感・切実感が高まります。

そして快感、これがもっとも子どもの意欲を生み出します。

快感は、達成すること、褒められることによって生まれるのではないのでしょうか。何かを達成すればそれが快感になるだろうことはすぐ理解できます。けれども、大きなことが達成できなくても、小さな工夫、気づき、やり方などが褒められたら、子どもはそれだけで気持ちよくなるのです。

子どもたちがその気になるということは、そうすることがよいことだという価値観の形成につながります。子どもがその気になり価値観をもつとき、それは他者に認められたとき、褒められたときではないのでしょうか。その大切な「褒める」という行為を、真っ先に実行しなければならないのは教師です。教師が本気で褒めて、子どもの行為に感動すれば、それは子どもの快感になります。教室の中に、常時そういう雰囲気があると、自然と子どもたち同士も認め合うことができるようになります。

学び合うことに対しても同様です。学び合っていることが教師に褒められる、わからないでいる友だちの困り感に寄り添って一緒に考えていたら先生に褒められた、自分のグループの全員ができるようになるまで仲間への支えをやり遂げそれを褒められた、そのとき生まれた快感が、自分から学び合おうという意欲を生み出すのです。

学び合わせるのではなく、子どもが学び合おうとするのが「学び合う学び」ということを理想論としてまつりあげるのではなく、少しずつその実現に向かって小さな一歩を積み上げていく、そういう努力をしていってもらいたい、それがわたしの願いです。

何年か前のセミナーで、秋田喜代美先生が「子どもが夢中になる、子どもが没頭する学び」というお話をされました。学ぶことに夢中になり没頭するとき、そこに存在しているのは、教師の指示に従うのではなく、自らの意思・意欲で学ぶ子どもです。わたしたちが目指している「学び合う学び」は、子どもが自ら学び合いたいと思い、学び合うことで学ぶ喜びを味わう、そういう学びでありたいものです。それには、どういう「やり方」をすればよいか、どうやらせればよいかという考え方にいつまでもとどまっていたはならないのではないのでしょうか。学び合う授業ではなく、子どもの目線に立った「学び合う学び」を実現するために。